追手門学院大学文学部紀要　28号　1993年11月30日

ガイ・フォークス・デイの政治と祝祭

指　　昭　博

The Politics and Festivity of the Fifth of November

Akihiro　Sashi

「ガイ・フォークス・デイ」――1605年11月5日に起きた「火薬陰謀事件」の記念日である。事典の説明によれば，

> もともと「火薬陰謀事件」の日である11月5日の夕刻に，民衆によって毎年行なわれる祝祭。ガイ・フォークスの人形を焼くために篝火が焚かれ，花火が行なわれる。……公園等の公共の場で行なわれたり，個人が自分の家の庭で行なったりする。[1)]

ということになる。事実，毎年この日にはイギリスの各地で，篝火や花火などによって，一種の火祭りが催されている。今では，単なる年中行事のひとつとして，その本来の意味が深く考えられることは少ないようであるが，ある特定の歴史的事件が，暦の上でこれほど長く「記念」されている例は，独立記念日や革命記念日を持たないイギリスではむしろ特異であるとされる。

従来，この祭りについては民俗学的な関心からの研究が中心で，「火薬陰謀事件」そのものの研究はなされても，その後の記念日についての歴史的な考察はほとんどなかったといってよいだろう。しかし，近年D・クレシーがこの側面に注目し，一連の研究を発表している。[2)] そこで，本稿では，クレシーを手がかりに，「11月5日の記念日」が持った意味を考えてみたい。

I

「火薬陰謀事件」そのものの経過はむしろ単純な出来事である。国王ジェイムズ1世の宗教政策に不満を抱いたロバート・ケイツビーやトマス・パーシーといったカトリック教徒が，国会議事堂下の地下室に火薬を仕掛け，議会の開会式に合わせて，国王と議員を共に爆殺しよう

としたが，事前に計画が発覚し，議会開会当日の11月5日未明，火薬に点火する役目を負っていた一味のガイ・フォークスが36樽もの火薬と共に地下室で発見され，ついでその他のメンバーも逮捕，処刑された，というものである。

事件そのものについては，不可解な点もあり，本当に爆破計画があったのかどうか，当時の秘書長官ロバート・セシルが仕掛けたカトリックを陥れるための罠ではなかったか，といった疑いも出されるなど，その成り行きとは違って，事件の背景は決して単純なものとはいえないのが実状である。[3)]

事件の謎はともかく，翌年1606年1月に制定された議会法によって，[4)] この11月5日は「火薬陰謀事件」を未然に防いだ記念日として，神に感謝を捧げるための公的な「祝日」とされ，教会では鐘を打ち鳴らし，篝火を焚き，記念の説教がなされることが定められた。

ウェストミンスターの議事堂横にある，いわば議会の教区教会の役目を果たしていた聖マーガレット教会では，毎年11月5日に，この事件にちなんだ説教がなされ，その他各地で行なわれた主要な説教とともに，その内容が出版され続けた。

この日が当時のイギリスの政治・社会に持った意味については，クレシーの研究で詳しくたどられている。クレシーは，聖人崇敬を否定した宗教改革後のイギリスが，聖人にちなんだ祝日に彩られていた，かつてのカトリック時代の暦の代替として，こういったプロテスタント的な記念日を必要としたのだと論じる。すでに16世紀，エリザベスの時代には11月17日の女王の即位記念日やアルマダ戦勝記念日などにも，篝火が焚かれ鐘が打ち鳴らされ，国教会体制の新たな暦を形成していた。[5)]

しかも，11月5日は，1688年の名誉革命の際にも，さらにもうひとつの重要な意味を加えることになる。オラニェ公ウィレムがトーベイに上陸したのがまさに11月5日であった。ステュアート期のプロテスタントにとって，この日はきわめて重要な記念日となったのである。さらにウィレムの誕生日が11月4日であったこともあり，依然として重要な日とされた17日の「エリザベス即位記念日」とともに，11月はホイッグの季節といった様相を呈していた。[6)]

より広範に，この日の存在を人々の記憶に止めさせることになったのが，各種の「暦」への記載であった。法律で定められた祝日が記載されるのは当然ともいえるが，11月5日を赤字で印刷するものも多く，印象を強めて，その重要性を強調している。また，こういった暦に収められていた，天地創造から現在までの歴史を30項目ほどにまとめて一頁に収めたような，ごく簡単な年表にも，ウィリアム1世のイングランド征服や宗教改革の開始等と並んで史上の重大事件として取り上げられることも多かった。[7)]

もちろん，法律で定められた祝日でもあり，国教会の「祈禱書」には11月5日の礼拝の規定が記されていた。たとえば，1773年の版によれば次のような記載が見られる。

毎年11月5日に用いらるべき感謝の祈りの次第。

最も反逆的で血なまぐさき火薬による殺戮計画から，国王ジェイムズ1世とイングランドの三身分がめでたくも救われしことへの感謝。さらには，同日にわが教会とわが国とを救い出さんがための国王ウィリアム陛下の喜ばしき到着への感謝。

まず，すべての教区の牧師は直前の日曜日の朝の礼拝時に，教会において公に教区民に対し，この日をきちんと祝うように注意を与えるように。さらに，11月5日の朝の祈りもしくは説教の後に，この遵守のために国王ジェイムズ1世の治世3年に制定されし議会法を公衆の前ではっきりとわかりやすく読み上げるように。[8)]

このように，11月5日の政治的な重要性――明らかに，プロテスタントによる反カトリック・キャンペーンの一環である――はことあるごとに強調されたようであるが，その政治性から，時々の時代状況を反映せざるをえなかった。

チャールズ1世やW・ロードの時代には，その反カトリック的性格がむしろ疎まれ，記念説教の内容が，必ずしも「火薬陰謀事件」そのものに関わるものではなく，一般的に「反逆罪」に関するものになるなどの変化も見られた。当然，人々の関心も希薄なものになったものと思われる。[9)]

共和制期には，議会軍の勝利を受けて，かつて「議会」が火薬陰謀事件の災難を免れた点を強調した「反カトリック」キャンペーンの一環として「11月5日」は政府の利用するところとなった。[10)] それでも，王政復古直前の1659年に，エセックスの教区司祭ラルフ・ジョスリンは「今日［11月5日］説教を行なう。聴衆はまばら」とその日記に記している。1663年にも「わずかの聴衆」に向って説教をしている。事件から半世紀を経て，その記憶の風化が進んでいたともいえるが，「説教」というものへの民衆の無関心をうかがわせるものとも考えられるだろう。[11)]

しかし，1670年代に，ヨーク公ジェイムズのカトリック教徒であるモデナのメアリとの結婚など，再び政治的事件にカトリックの姿が見え隠れしはじめると，ジョスリンは，1675年に，事件から70年目の記念ということもあって，説教の際に事件についての説明を行なっている。前年およびこの翌年にも彼は反教皇的な説教を行なっており，クレシーは事件の再教化が広く計られた当時の状況を反映したものと考えている。[12)]

18世紀になると，膨大な日記を残したことで知られる司祭ジェイムズ・ウッドフォードが，まだサマセットで牧師補を務めていた1763年に，「11月5日」の説教を行なっている。しかし，その実態は「会衆はわずか。鐘撞き男が酒手を要求した。慣習だとのことなので，1シリング与えた」といったものであった。彼自身，安定した聖職禄を得た後は，この日には外出が

多く，説教は他人任せで，以後，自分で説教をしたという記載は最後まで現われない。[13)]

明らかに，教会の説教に関連しての――いわば，本来あるべき形での――「11月5日」への関心は薄れていたようであるし，19世紀になれば，1829年のカトリック教徒解放以降，民衆レベルでの反カトリック感情は根強く残るものの，公の形での反カトリック的な状況は緩和の方向へ向ったのだが，法律による「11月5日」の規定が廃止されるのは，ようやく1859年のことであった。

すでに，1858年にはカンタベリ大主教が，11月5日の礼拝は「不規則なものとなり，無視されていて」「廃れている」と認めているような状況であった。この年，問題は議会に持ち込まれ，「政治的」な礼拝の規定を祈禱書から削除することが議論された。反対論もあったが，もはや「11月5日」を特別視する時代ではないとの認識で一致をみた。自由党議員のジョージ・ハットフィールドは，こういった規定が何年にもわたって存続してきたことに驚き，ロンドン主教もこの特別な祈りが，人々の胸中に憤慨を引き起こすものであることを認めている。法案は翌1859年に可決され，「11月5日」は国教会の教会暦から公式行事としては消えることになったのである。[14)]

II

しかし，「公式の」いわば「エリート」の行事としての「11月5日」は姿を消すことになったが，今日でも，この日は「ガイ・フォークス・デイ」として民衆の祝祭として存続している。明らかに，公の「11月5日」と祝祭としての「ガイ・フォークス・デイ」には性格の違いがありそうである。

本節では，民衆の側から見た「11月5日」の展開をたどってみよう。そもそも，「ガイ・フォークス・デイ」という名称であるが，『オクスフォード英語辞典』（OED）によると「ガイ・フォークス・デイ」という名称の文献上の初出は，1825年に出版されたW・ホーンの『エヴリデイ・ブック』における次の文章であるとされる。

> 貧しい少年達がガイの歴史について，ことに彼の衣装について，よく知っているのだとは考えるべきでない。彼らには，「ガイ・フォークス・デイ」，もしくは彼らがしばしばそう呼ぶように「教皇の日」は祝日なのであり，……そのお祭りの楽しみのゆえに，この季節の最大の祝日なのである。彼らは，かなり前から準備をするが，まず「ガイ」を用意するのではなく，それを燃やすための燃料，それに［ガイ人形を］焼くときに投げ付ける花火を準備する。「ガイ人形」は最後であって，「篝火」が一番大切である。

図1　ホーン『エヴリデイ・ブック』掲載の「ガイ・フォークス」(G. クルックシャンク作)

ガイ人形はそれに着せる衣装を手に入れたのちに，藁で簡単に作られる。古い上着にチョッキ，ストッキング。それらはたいていサイズが合わないようなものである。……床屋の使う帽子の木型を頭にし，……チョークや木炭で目や眉を描く……。[15]

ホーンのこの本にはG・クルックシャンクが描いた「ガイ」の姿が掲載されており，ホーンによれば「クルックシャンク氏によって，この項目のために描かれたもの以上に，「人形のガイ・フォークス」をよく表しているものはない」。さらに彼は説明を次のように進める。

乱闘は，今ではまれにしか起きなくなったが，「わたしの幼い頃」には，ガイとガイが鉢合わせになれば，戦闘開始であった。……打ち負かされたほうの「ガイ」が奪われて，勝利が決まった。
こういった時代の，立派なガイを燃やす光景は，今日では想像もできない大騒ぎであったのだ。リンカンズ・イン・フィールドの篝火は，こういった無秩序の最たるものであった。……200台もの荷車で篝火を準備し，30以上の「ガイ」が夜の8時から10時の間に，絞首台に掛けられ焼かれたのを，老人なら思い出す。[16]

図2　パイン『英国の衣装』に描かれた「ガイ・フォークス」

明らかに，ホーンの時代よりもかなり以前からこういった習慣が一般化していたことがうかがえる。事実，これと同じような情景は，1805年に出版されたパインの『英国の衣装』の中にも描かれているし，その表題も「ガイ・フォークス」と題され，記述には「毎年11月5日には，ガイ・フォークスの人形を焼くという下層民衆に非常によく広まった習慣がある」と記されており，「ガイ・フォークス・デイ」という呼称はともかく，すでにこの時点でそこそこの伝統のある風習であったことをうかがわせる。[17]

さらに遡って，1770年代に執筆されたジョン・ブラントの『民間伝承考』でも，

> 子供たちが，悪名高き反逆者ガイ・フォークスの人形を作って……「ガイ・フォークスを忘れないで」と言いつつ，お金をせびりながら通りを運んで行くことは，ロンドンやその周辺でも，今でもなお慣習となっている。[18]

という記述（傍点筆者）が見られ，実態としての「ガイ・フォークス・デイ」の出現時期はさらに遡りそうである。

一方で，1876年に出版されたT・ダイアの『英国の民間習俗』では

> 11月5日は，以前ほどには，民衆によって大きな祝祭的な気晴らしとして祝われることはない。もともとはガイ・フォークス人形を焼くのは，とりわけ下層階級の間でおおいに

流行った儀式であった。しかし，今では，主に学童に限られるし，それとても，以前ほどには人気はない。以前はガイの人形を焼くことは，おそらくは現在では知ることのできないほどの騒動であった。[19]

と，すでに祭りが過去のものになろうとしていると述べられている。その他，ホーンの『エヴリデイ・ブック』に紹介された各地での祭りの様子などから考えて，いわゆる「ガイ・フォークス・デイ」の形は18世紀の後半に出来上がり，19世紀前半にピークを迎え，世紀後半には衰退に向っていたと，一応の概観ができそうである。

さらに，ここで注意しなくてはならないのは，引用した文章の多くで，この祭りが「下層民衆」によって行なわれた祝祭である，ということを特記している点である。

確かに，18世紀末にはエリートがこういった「民衆の騒ぎ」から手を引き始めた，との指摘もなされている。[20] いわば，説教や礼拝規定の形骸化といった為政者の意図する「11月5日」の風化の進行とともに，「愛すべき」民衆の娯楽祝祭である「ガイ・フォークス・デイ」が出現してくるようにも思える。しかし，果たして「ガイ・フォークス・デイ」は，政治的なかつての「11月5日」が「変貌したもの」と結論してよいのだろうか。

Ⅲ

クレシーは，主に『タイムズ』の記事に依拠して，「ガイ・フォークス」の人形が登場するのは18世紀の末で，「11月5日」が「ガイ・フォークス・デイ」と呼ばれるようになるのは19世紀初めのことで，ヴィクトリア女王即位の頃にはその呼称が確立していたと考える。[21]

このクレシーの解釈に従えば――ただし，前節でみたように，時期については多少の留保が必要であろう――民衆娯楽としての「ガイ・フォークス・デイ」は，18世紀末に生まれたもので，政治的な意味を失ったかつての「11月5日」の残滓ということになるのかもしれないが，このような「直線的な」変貌と理解するには，両者の違いが大きすぎるように思える。何かこの両者を結びつけるものがあったと考える方が自然ではないだろうか。

当初から，政府・教会が求める「11月5日」と民衆にとっての「11月5日」にはズレはなかったのだろうか。説教への出席の悪さは，とりもなおさず，両者の思いのズレの現れと解釈できるだろうし，「11月5日」に歌われた俗謡

11月5日を
火薬陰謀事件を忘れないで
火薬陰謀事件を忘れたっていいなんて

そんなことは決してないのだから

の地方毎に異なる様々なヴァリアントが19世紀初めには出来上がっていたということは[22]，「ガイ・フォークス人形」の有無はともかく，民衆レベルでの祝祭としての「11月5日」の歴史が決して短いものではなかったこと，「もうひとつの11月5日」があったことを示しているように思われる。

事実，ロバート・W・マーカムソンは，民衆娯楽の文脈から，「11月5日」について次のような事例を紹介している。

> 1686年にある人がこの「火薬陰謀事件の夜の歓喜と遊戯」や，人々の享受していた「逸楽の特権」について述べている。大きな町ではどこでも，特別にこの日が祝われた。1742年にノーサンプトンでは11月5日は「すべての教会が打ち鳴らす鐘の音」と儀礼的な行列行進で祝われ，「その夜は篝火，花火，その他の喜びの表明で更けていった」。よく似た祝いが1740年のグロスターでも行われ，とくに大篝火や花火をはじめ，人々が楽しめるような娯楽で一日の幕が閉じた。農村もまたこの日を祝った。「慣習にのっとり，村々の祭りが祝われた」と，1671年11月5日にランポートのトマス・アイシャムは記している。そして1766年の同じ日，「草地の篝火」についてウィリアム・コールは彼のブレッチリ日記に記した。ガイ・フォークス・デイのならわしとなった娯楽は，さまざまに火を用いたもの，つまり篝火，銃砲，爆竹，たいまつ，花火が中心である。ノーサンプトンシァのウェストン・フェイヴェルでは，「この日の飲めや歌えの大騒ぎが，数週間も前から心待ちにされ」，大篝火を焚くために薪が特別に集められた。リンカンでは11月5日は一年の主要な祝日の一つであり，1818年のこの日は，「民衆のいつもの恥ずべき行為，つまり牛掛け，蛇花火投げ，爆竹など」がとりわけひどかったと記者は報じた[23]。

17世紀後半から19世紀までの概観ではあるが，先にたどった「政治性」を持った「11月5日」とは趣を異にしていることがわかる。

さらに，クレシーによれば，1670年代にはロンドンの徒弟たちは，「11月5日」を反カトリックの火祭りに仕立てると同時に，とりすました社会秩序への攻撃の日として，馬車を止め，酒と篝火のための金を要求していた[24]。

1673年には，教皇を象徴する品々と共に「バビロンの売春婦」の人形を担ぎ上げてのパレードを行ない，最後には篝火のなかに放りこんでいる。これ以前には，人形を焼くという行為はほとんど報告されていないので，これが後年の風習の原型ではないか，とクレシーは考える[25]。

カトリックへの警戒心が強まると，ホイッグがこういった「教皇人形火焙り」を演出したようであるが，同時に群衆によるカトリック教徒襲撃も行なわれた。『1678年11月5日ロンドンにて行なわれし教皇人形焼却の次第』といった類の記念のプログラムが出版されもした。[26)]

18世紀に入っても同様の報告がある。18世紀初めのロンドンでは，「11月5日」は「ロンドン市長就任式」に次いで，民衆の祝祭的気分が高まる日となっていたようである。人々は教皇などの人形を火焙りにして，気分を盛り上げた。作家ネッド・ワードの描くところでは，

6時頃ともなれば，
男の子らが桶や木切れを失敬し，
威勢のよい輩は，気晴らししようと，
薪を買うべく小金をせびる

といった有様で，いわゆる「ガイ・フォークス・デイ」の形をすでにうかがうことができるが，その性格はもっと荒々しいものであった。家々は煌々と明かりを灯し，ますます大きく膨れ上がった群衆は通りを練り歩き，明かりのついていない家を見つけると，「この明かりをつけていない家は，ジャコバイト野郎のものに違いない」などと気勢を上げ，襲撃することもあったようである。[27)] いわば，「11月5日」の持つ反カトリック性をバネにした，庶民なりの現状への不満のはけ口の口実になっていたように思える。

さらに，興味深いのは，サミュエル・バトラーの風刺詩『ヒューディブラス』に1726年にウィリアム・ホガースがつけた挿し絵に，「ガイ・フォークス」とほとんど同じ形での民衆の行進が描かれている点である。[28)] ただし，この場合カトリックの「ガイ・フォークス」ではなく，それどころか逆にピューリタンを戯画化した姿であるのだが，椅子に座らせた人形を神輿のように担ぎ上げるなど，その相似には驚かされる。しかも，その人形を絞首刑にして，火焙りにする点まで同じである。

この図は「シャリバリ」等との関連で取り上げられることも多いが，[29)] 確かに，「スキミントン・ライド」といったシャリバリの英語名称に見られる特徴である，「木の棒に跨がせる」という形は，単なる類似以上の関連性をうかがわせる。これが，18世紀半ばの民衆の示威行動の形として一般的なものであったと考えてよいなら，明らかに「ガイ・フォークス・デイ」もまたその文脈で理解することができるのではないだろうか。[30)]

ここで「11月5日」と「シャリバリ」を結びつける興味深い事例がいくつかある。先に登場した司祭ジェイムズ・ウッドフォードが，1768年に記すところでは，

今朝，11月5日なので，キャリーで説教を行なった。……食事をして夕刻は牧師館で過

図3 『ヒューディブラス』挿絵（W. ホガース作）

ごした。今夕，クリード判事の人形がキャッスル・キャリーの通りを消防車に乗せられて行き，屋敷の庭園へと運ばれ，判事の家の真前で篝火が焚かれ，その火の中で焼かれた。というのも，何週間か前の日曜日にキャリーの教会の桟敷で騒ぎを起こしたのに，ジェイムズ・クラークを出頭させなかったという理由で，この判事がキャリーの教区委員をウェルズでの裁判にかけたためである。教区の全員が判事に反感を持っており，彼らはウェルズでの訴訟では教区委員の支援をするつもりである。[31)]

ロンドンでも1785年に「11月5日を忘れないで」という歌のフレーズが「ピットと商店税を忘れないで」と言い換えられたり，1788年にはチャールズ・フォックスの人形が焼かれたりと，同様の事例を見ることができる。[32)] また，1831年の11月5日には，選挙法改正法案に反対していた国教会の主教たちに抗議して，多くの村々で主教の人形が，同じ様に行進のうえ燃やされている。[33)]

1850年にも，ローマ・カトリックの組織がイギリスで再確立されると，この，いわゆる

「教皇の干渉」に反発した民衆が，教皇によりウェストミンスター司教に任命されたワイズマン枢機卿の人形をガイ人形の代わりに焼き，反ローマ感情をあらわにし，「数においても，規模においても近年の倍以上の篝火」が各地で焚かれ，ロンドンでは通常の年よりも多くのガイが焼かれたと報告されている。[34)]

この他にも，時々の政治情勢に対応して，ロシア皇帝やトルコのスルタン，アラビィ・パシャ，アイルランド独立運動の闘士パーネルなど，民衆の「抗議」の対象となった人物の人形が登場したことが報告されているように，[35)] 特定の人物を懲らしめるために，11月5日が利用されたのは明らかである。

したがって，こういった行為を支えたメンタリティとして，「11月5日」が「シャリバリ」に通じるものを持っていたと考えても，それほど的外れではないだろう。その意味で，「11月5日」は「火薬陰謀事件」の記念日としての性格，すなわち反カトリック・プロパガンダの役割と，民衆が何らかの抗議行動を起こしたり，エネルギーを発散する祝祭日としての性格が絡み合った「重層構造」を，早くから持っていたといえるだろう。

もちろん，この二つの性格はまったく別個のものではない。むしろ，その境界線はきわめて曖昧である。こういった民衆の異議申し立てが，純粋に庶民の中から生み出されたものであるのか，それとも何らかの政治的意図を持った「仕掛人」がいたのか，については慎重に判断しなくてはならない重要な問題である。[36)] 残念ながら，簡単な概観である本稿では，その問題を追求し判断を下すだけの準備を持たない。ただ，「ガイ・フォークス・デイ」の出現は，単純なエリート文化と民衆文化の乖離という文脈ではなく，政治性を強調する支配＝エリートの思惑とその枠組みを換骨奪胎しようとする庶民文化の，複雑な絡み合いの中から生み出されてきたものであった，とだけはいえるだろう。

付　記

民俗学的な立場からは，この祭りは，ケルト的習俗の名残であって，古くからあった祭礼の変形――たとえば「ハロウィンの習慣を吸収した」といった指摘――であるという見解がある。[37)] 事実，現在でも，あまり火薬陰謀事件とは関係がなさそうな火祭りの行事が11月5日に行なわれている例も見られる。クレシーは証拠がないかぎり，そのような関係を認めるのは慎重であるべきだとの立場を取る。彼によれば，11月5日は単にたまたま議会の開会の日であったのであって，民俗的な性格の入り込む余地はない，ということになる。[38)]

しかし，たとえその起源がいかに「偶然」であったにせよ，その見解は少々窮屈に過ぎるのではないだろうか。「11月5日」には何の意味はないにしても，その日にその日の周辺にあった様々な民俗的行事が収斂して行くということは当然考えられることである。また，先行する民衆の祝祭的行為の形が「11月5日」の行事に応用されて行くということも当然起こっただ

ろう。すなわち，「原因」としてはクレシーの言うように認めがたいが，「結果」としての関連は認められるのではないかということである。本稿でたどったように，元来の支配者の意図を超えた「11月5日」が生み出され，民衆に支持されて行くには，それなりの理由があったと考えるべきではないだろうか。

注

1) Room, A., *Dictionary of Britain*, Oxford, 1986, p. 125.
2) Cressy, D., *Bonfires and Bells: National Memory and the Protestant Calendar in Elizabethan and Stuart England*, Berkeley, 1989; id., 'The Protestant Calendar and the Vocabulary of Celebration in Early Modern England', *Journal of British Studies*, 29 (1990); id., 'The Fifth of November Remembered', in R. Porter (ed.), *Myths of the English*, Oxford, 1992.
3) Rf. Hurstfield, J., 'A Retrospect: Gunpowder Plot and the Politics of Dissent', in his *Freedom, Corruption and Government in Elizabethan England*, London, 1973; Nicholls, M., *Investigating Gunpowder Plot*, Manchester, 1991.
4) 3 Jac. I, c. 1.
5) Cressy, *Bonfires*, passim.
6) Id., 'The Fifth of November', p. 76.
7) Capp, B., *English Almanacs 1500-1800: Astrology & the Popular Press*, Ithaca, 1979, p. 216 & plates.
8) *The Book of Common Prayer*, Oxford, 1773, no pagenation.
9) Cressy, *Bonfires*, p. 153; id., 'The Protestant Calendar', p. 43.
10) Id., *Bonfires*, ch. 10; id., 'The Fifth of November', p. 74.
11) Macfarlane, A. (ed.), *The Diary of Ralph Josselin*, London, 1976, pp. 453 and 502.
12) *Ibid.*, pp. 571, 588 and 594; Cressy, *Bonfires*, p. 175.
13) Beresford, J. (ed.), *The Diary of a Country Parson: The Reverend James Woodforde, 1758-1802*, vol. 1, Oxford, 1926, p. 33.
14) Cressy, 'The Fifth of November', pp. 81-82.
15) Hone, W., *Every-Day Book*, London, 1825, clm. 1429-30.
16) *Ibid.*, clm. 1431-33.
17) Pyne, W., *British Costumes*, London, 1805, plate XXXI.
18) Brand, J. *Popular Antiquities of Great Britain* (W. Hazlitt ed.), London, 1870, vol. 1, p. 221.
19) Dyer, T., *British Popular Customs*, London, 1876, pp. 410-411.
20) Paz, D. G., *Popular Anti-Catholicism in Mid-Victorian England*, Stanford, 1992, p. 228.
21) Cressy, 'The Fifth of November', p. 79.
22) Rf. Dyer, *op. cit.*
23) Malcolmson, R. W., *Popular Recreations in English Society 1700-1850*, Cambridge, 1973, pp. 25-26. (川島・沢辺・中房・松井訳『英国社会の民衆娯楽』平凡社，1993年，61-62頁)
24) Cressy, 'The Fifth of November', p. 75.
25) *Ibid.*, p. 75.
26) *Ibid.*, p. 75.
27) Irving, W. H., *John Gay's London*, Cambridge, Mass., 1928, pp. 188-189.

28) Butler, S., *Hudibras*, part Ⅲ, canto Ⅱ.
29) 近藤和彦「シャリバリ・文化・ホゥガース」『思想』740 (1986), 174－76 頁。
30) Puz, *op. cit.*, p. 228.
31) Beresford (ed.), *op. cit.*, p. 81.
32) Cressy, 'The Fifth of November', p. 83.
33) Malcolmson, *op. cit.*, pp. 79－80. (邦訳 173 頁)
34) Chambers, R. (ed.), *The Book of Days*, London, 1869, vol. 2, p. 550; Cressy, 'The Fifth of November', p. 81.
35) *Ibid.*, p. 83.
36) Underdown, D., *Revel, Riot and Rebellion: Popular Politics and Culture in England 1603-1660*, Oxford, 1985, p. 282.
37) *Ibid.*, p. 70.
38) Cressy, 'The Fifth of November', pp. 68－9.

1993 年 9 月 30 日　受理